

2—任運莊の出発

(1) コミュニティの中へ

「老人ホームの規模は小さくして、中みは清潔に、世話は行き届いたものでありたい」という主旨に強く賛同し、理事をひき受けられたのは木下郁（元大分県知事）、羽田野次郎（元代議士）の二氏であった。県下で信望厚い二氏を中心に、地元緒方町の若い信望家の理事たちが加わって、昭和五十年社会福祉法人「任運社」が^{ふんうんしゃ}出発した。場所は当法人誘致に熱意を示し、その敷地を無料で提供した緒方町である。

公有地を私立の老人ホームに提供するということは、この日本では大きな福祉的意義があるといわねばならない。それは今日、福祉施設建設に対して反対の住民運動が起こっているからである。大都会だけではなく、わが県の片田舎の地区でも反対運動が起こり、ついに精薄児施設の建設が中



注1——最近乱脈経営による福祉法人の崩壊状態がめだっている。九州だけでも朝日新聞(55・9・19)は「実態を示す裏帳簿は九億円近い赤字会計。……一方金融機関は負債総額十六億円とはじいている」として飯塚市いずみ福祉会の実態を分析。同紙(55・11・11・12)はまた二億四千万円の負債をもつ筑後市の素王福祉会の再建への不誠実を連日報じている。

注2——大分合同新聞(50・9・3)は悪徳福祉家として全国的に報道された大分県の福祉法人S会の理事長(A)の詐欺・横領事件を次のようにまとめた。実名で発表されているが、ここでは特にAとする。六月二十四日のA逮捕らしい、明るみ出た不正に動かし金はざっと四億円にのぼり、そのうち大分地検に送致したのは約二億三千五百四十万円。四十四年に福祉事業に頭を突っこんだAは、ありとあらゆる手を使って施設建設費のごまかしから入所者のチリ紙、洗剤に至るまですべてを金に替えて「黒い蓄財」を増やしていたわけ。

この日追送致されたのは——(各項目の詳しいデータは省略して項目だけ挙げる)▽架空または水増し領収書による横領、その額二千六十三万円▽職員の食事、牛乳代の着服横領 総額六百二十四万円▽職員給与のピンハネ(三施設に働く職員七十五人に対し)一千百八十四万円余▽人件費の残額の横領 二千三百五十五万円余▽架空職員の給料の横領 三十六万円余▽老人小遣いの横領 S荘だけで九十八万円余▽葬儀費用の過大徴収 九十七万円▽チリ紙、洗剤、医療費などの代金詐取 百五十万円。——「日本一の金持ちになる」と豪語していたAは、金の延べ棒や百万円の時計を買い入れるなど派手な生活ぶりをのぞかせている。一億近い預金といい、福祉にたずさわる者には無縁のはずだが(同紙・50・6・27)。

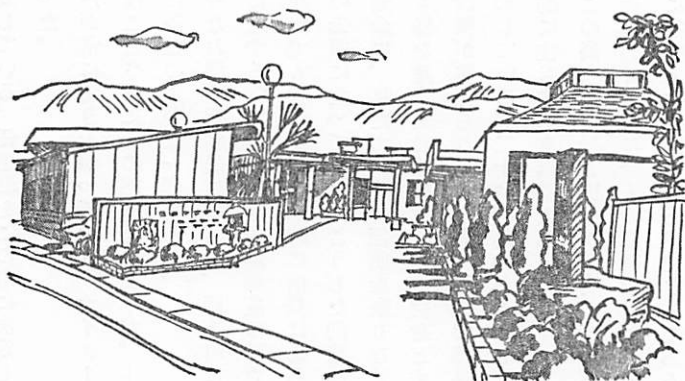
注3——西日本新聞(54・12・1)はリードに「大分県特別養護老人ホーム協議会は現状ではこれ以上施設ができる」と過当競争で経営難になるとして、近く県にホーム増設に慎重を期すよう陳情する方針だ。これに対して一部では、福祉関係者にあるまじき施設エゴだと、強く反撥、ホットな福祉論争を繰り広げている」と述べて、本文でさらに詳説している。

止になった。こうした無恥ともいふべき反福祉の運動を無批判に放置してはならない。しかし、同時に福祉施設側もその閉鎖性を脱して地域に存在理由を確立して、それだけの効用のある内容を持たねばならない。

——任運荘は出発に当たってそう決意した。

緒方町は、かつて源頼朝に追われた義経が一度は頼ろうとした豊後一帯の支配者緒方三郎の居住地に当たる。今はおがた米を誇りとする人口九千の純農村。過ぎし時代の石仏・石風呂等の石造文化が豊かに散在し、野の仏が特に美しい田園である。それを眺める高台の住宅地の真中に、任運荘は静かに息づいている。

大分市と熊本を結ぶ豊肥線「おがた駅」は大分駅より一時間の距離。「荒城の月」の作曲で有名な岡城のある「豊後竹田」駅は次の二つめの駅に当たる。施設は駅より徒歩五分の町中にありながら、その窓からは久住・祖母山系を居ながら遠望でき、静寂の中にも人恋うる淋しさはない。老人ホームにとって生命線とも



任運社の全景

いふべき医療機関として、郡立総合病院が道を隔てて隣接している。任運荘をこの町に決定した第一の理由は、信用のおける医療施設の存在することであつた。

さらに道下の町民総合グラウンドからは、若者たちの声が常に湧き上がっており、ナイターのカクテル光線は老人たちの心をかきたててくれる。夏の夜はことさらにその感は深いようだ。——特養にとつてこの環境はほぼ完全に近いといえよう。環境は福祉の重要な一面である。

地理的環境に加えて文化的環境も見逃せない。古さを今なお濃く残す農村地区で、緒方町はたえず前進の気風をもち、町政にも活気があり、主要農産物に対する町独自の価格保証制度の確立を始めて、特産地形成等の農業振興も緒に着いている。なかでも青年団活動は時に消長はあろうとも、昭和二十五年よりめざましい歩みを続け、常に進歩の先頭に立ってきた。こうした創造性ある農村文化の風土の中に、任運荘が育まれ根を下ろしゆく運命に、私たちはその価値を限りなく思う。医療と福祉の面に限ってみても、昭和十四年全国的にも稀な産業組合診療所をその前身とする郡立総合病院は、すでに四十年の歴史をもち、今は最新の設備が整えられ、壮年者に無料で簡易人間ドックを試みるなど、コミュニティケアに積極的に参加している。二十余年たった老朽した町立養護老人ホームは一挙に一人個室制に新生したが、全国的に注目すべき事業である。

老人センター、リハビリセンターも病院に付設され、この高台に福祉と医療が集合している姿はめざましい。これらがそれぞれの機能を發揮し、相互に連携して地域の老人の福祉を分担しあう時、コミュニティは命に燃え、過疎の地の老人たちも安らかに故郷と共にあることができるであらう。

いふべき医療機関として、郡立総合病院が道を隔てて隣接している。任運荘をこの町に決定した第一の理由は、信用のおける医療施設の存在することであつた。

さらに道下の町民総合グラウンドからは、若者たちの声が常に湧き上がっており、ナイターのカクテル光線は老人たちの心をかきたててくれる。夏の夜はことさらにその感は深いようだ。——特養にとつてこの環境はほぼ完全に近いといえよう。環境は福祉の重要な一面である。

地理的環境に加えて文化的環境も見逃せない。古さを今なお濃く残す農村地区で、緒方町はたえず前進の気風をもち、町政にも活気があり、主要農産物に対する町独自の価格保証制度の確立を始めたとして、特産地形成等の農業振興も緒に着いている。なかでも青年団活動は時に消長はあろうとも、昭和二十五年よりめざましい歩みを続け、常に進歩の先頭に立ってきた。こうした創造性ある農村文化の風土の中に、任運荘が育まれ根を下ろしゆく運命に、私たちはその価値を限りなく思う。医療と福祉の面に限ってみても、昭和十四年全国的にも稀な産業組合診療所をその前身とする郡立総合病院は、すでに四十年の歴史をもち、今は最新の設備が整えられ、壮年者に無料で簡易人間ドックを試みるなど、コミュニティケアに積極的に参加している。二十余年たった老朽した町立養護老人ホームは一挙に一人個室制に新生したが、全国的に注目すべき事業である。

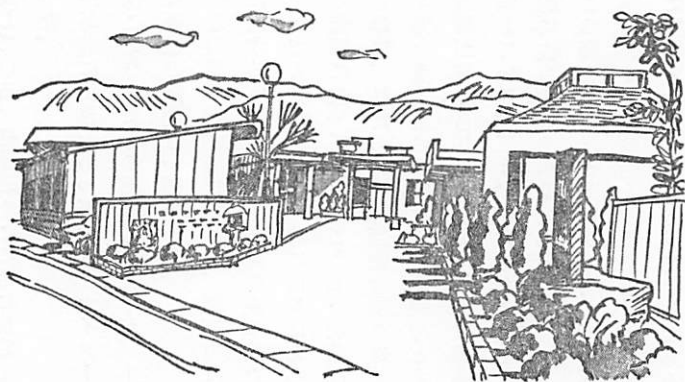
老人センター、リハビリセンターも病院に付設され、この高台に福祉と医療が集合している姿はめざましい。これらがそれぞれの機能を發揮し、相互に連携して地域の老人の福祉を分担しあう時、コミュニティは命に燃え、過疎の地の老人たちも安らかに故郷と共にあることができるであらう。

止になった。こうした無恥ともいべき反福祉の運動を無批判に放置してはならない。しかし、同時に福祉施設側もその閉鎖性を脱して地域に存在理由を確立して、それだけの効用のある内容を持たねばならない。

——任運荘は出発に当たってそう決意した。

緒方町は、かつて源頼朝に追われた義経が一度は頼ろうとした豊後一帯の支配者緒方三郎の居住地に当たる。今はおがた米を誇りとする人口九千の純農村。過ぎし時代の石仏・石風呂等の石造文化が豊かに散在し、野の仏が特に美しい田園である。それを眺める高台の住宅地の真中に、任運荘は静かに息づいている。

大分市と熊本を結ぶ豊肥線「おがた駅」は大分駅より一時間の距離。「荒城の月」の作曲で有名な岡城のある「豊後竹田」駅は次の二つめの駅に当たる。施設は駅より徒歩五分の町中にありながら、その窓からは久住・祖母山系を居ながら遠望でき、静寂の中にも人恋うる淋しさはない。老人ホームにとって生命線とも



任運社の全景

私たちの分担を具体的に予想してみる。任運荘は老人たちが必要によって入所し、自由に退所する場所とならねばならない。老人の涙を代償として家族が福祉を享受する偽りの福祉を消していく。そのためにも公立病院はやがて訪問看護制を実行に移すであろう。ホーム側は老人介護の専門的機能を生かして、在宅老人のために農繁期の一時託老所と入浴サービスを既に開始した。五十五年よりは新しく「老人介護相談所」を併置して、すべての老人相談に応ずる体制を整えた。老齡化社会に入ろうとする時、公私の無数の老人相談が網の目のように張られてこそ実効を上げることができる。「床ずれゼロ」の実績を保持している任運荘の噂を聞いて、町内だけでなく県境を越えて、その治し方の相談が多い。特養入所の家族だけでなく、病院入院患者の家族よりの相談が混じっている現状はいささかも悲しい。それだけに相談事業の開始は意義が深いとされよう。

介護相談一覧表(55・428)

受付番号

相談者と相談内容

1 北九州市・嫁(家庭より)

三年間寝たきりの姑に三センチの床ずれができ、治らないのであせっている。

2 名古屋市・娘(病院より)

入院中の実母の付添に二週間行けず、付添婦をつけたら、十センチの床ずれ発生。病人も家に帰ることが、三人の子を抱えている。どうすればよいか。

3 緒方町(地元)・娘(病院より)

入院中の実父に床ずれができた。その処置方法を。

4 緒方町（地元）・任運荘の寮母（家庭より）

隣りの老夫婦世帯で夫が寝たきりで十センチの床ずれあり、一時保護をしてほしい。

5 大分市・本人（家庭より）

長男に看てもらいたいのが嫁が嫌っている。老後が不安。自分が築いた店なのに何も話してくれない。

百歳の姑は入院、それも気になると、本人自ら訪問して訴える。家には知らずなともいう。

6 緒方町（地元）息子（家庭から）

寝たきりの父の介護方法について。義母が誤った世話に固執し、床ずれができた。任運荘の処置方法通りできないで困っている。

7 大分市・看護婦（病院より）

入院中の老人に施設利用をすすめるが、承知せず、啓蒙方法と任運荘の新聞を送ってほしい。

8 緒方町・嫁（家庭より）

痴呆症の舅がおむつをとるので、毎日、汚物の山とのたたかい。排泄介護の方法を。

9 山口県・娘（病院より）

入院中の父を再起させたい。かって老人ホームに居たが、任運荘なら入るというが、他県からの入所手続きを教えてほしい。

再度訴えあり、福祉事務所の態度が頑くなりで困惑しきっている。

10 宇佐市・息子（家庭より）

入院中の実父に床ずれができた。その処置方法を。

4 緒方町（地元）・任運荘の寮母（家庭より）

隣りの老夫婦世帯で夫が寝たきりで十センチの床ずれあり、一時保護をしてほしい。

5 大分市・本人（家庭より）

長男に看てもらいたいのが嫁が嫌っている。老後が不安。自分が築いた店なのに何も話してくれない。

百歳の姑は入院、それも気になると、本人自ら訪問して訴える。家には知らずなともいう。

6 緒方町（地元）息子（家庭から）

寝たきりの父の介護方法について。義母が誤った世話に固執し、床ずれができた。任運荘の処置方法通りできないで困っている。

7 大分市・看護婦（病院より）

入院中の老人に施設利用をすすめるが、承知せず、啓蒙方法と任運荘の新聞を送ってほしい。

8 緒方町・嫁（家庭より）

痴呆症の舅がおむつをとるので、毎日、汚物の山とたたかい。排泄介護の方法を。

9 山口県・娘（病院より）

入院中の父を再起させたい。かつて老人ホームに居たが、任運荘なら入るというが、他県からの入所手続きを教えてほしい。

再度訴えあり、福祉事務所の態度が頑くんで困惑しきっている。

10 宇佐市・息子（家庭より）

私たちの分担を具体的に予想してみる。任運荘は老人たちが必要によって入所し、自由に退所する場所とならねばならない。老人の涙を代償として家族が福祉を享受する偽りの福祉を消していく。そのためにも公立病院はやがて訪問看護制を実行に移すであろう。ホーム側は老人介護の専門的機能を生かして、在宅老人のために農繁期の一時託老所と入浴サービスを既に開始した。五十五年よりは新しく「老人介護相談所」を併置して、すべての老人相談に応ずる体制を整えた。老齡化社会に入ろうとする時、公私の無数の老人相談が網の目のように張られてこそ実効を上げることができる。「床ずれゼロ」の実績を保持している任運荘の噂を聞いて、町内だけでなく県境を越えて、その治し方の相談が多い。特養入所の家族だけでなく、病院入院患者の家族よりの相談が混じっている現状はいささかも悲しい。それだけに相談事業の開始は意義が深いとされよう。

介護相談一覧表(55・428)

受付番号

相談者と相談内容

1 北九州市・嫁(家庭より)

三年間寝たきりの姑に三センチの床ずれができ、治らないのであせている。

2 名古屋市・娘(病院より)

入院中の実母の付添に二週間行けず、付添婦をつけたら、十センチの床ずれ発生。病人も家に帰ることが、三人の子を抱えている。どうすればよいか。

3 緒方町(地元)・娘(病院より)

寝ついて八年の実母、骨折して床ずれができたが、やっと治った。おむつ外しの方法を。

11 行橋市・本人（家庭より）

寝ついて二十年、新聞で任運荘を知った。入所手続きを。入浴がしたい。リハビリがしたい。

12 同右・娘

母は地城のホームを見学して納得できず、任運荘を強く希望。叶えさせて新しい人生を歩かせたい。

13 福岡市・病院

おむつ外しの方法を具体的に教示されたい。特に失禁者のおむつ外しについて。近く訪問したい。

14 北九州市・主婦（家庭より）

おむつを作って近くのホームにあげようとしたら断られた。必要なら送るからサイズを示せ。

15 熊本市・娘（家庭より）

痴呆化した母、五年前より寝たきり。話しは理解できるが、意欲全くなく、失禁も治らない。情ない。

16 福岡市・妻と三男（病院より）来訪

入院中の父に床ずれ十センチでき、病院側は「熱がとれねば治らない」というが、ぜひ治したい。病院が任運荘の治療法を許可するかどうか心配。

17 下関市・主婦

新聞記事で亡き父母を思い出した。金一封を送る。訪問したいとの申出。

18 熊本市・本人（家庭より）

「こここそ自分を救ってくれる所」と喜んだ。家族はよくしてくれるが、嫁は身重で不安。ホームに

入りたいが息子が許してくれない。「にんうん荘」便りは家族に悪いので送らないでほしい。

19 下関市・妹（家庭より）

兄六十六歳に床ずれ、嫁が世話しているので、思うにまかせない。

20 三重県・嫁（家庭より）

老父單車から転落歩行困難。ポータブルトイレ使用にも失敗。二人の子供もあり、父の世話がしかねる。父に意欲をもたす方法を。

21 愛知県・娘（家庭より）

倒れて一カ月の父。おむつをあてるのがよいのか、はずすのがよいのか。

22 名古屋市・福祉大学生

おむつを外すことの意義を問う。実習をさせてほしい。老人介護の理論と実践を体系化したい。

23 東京都・特養ホーム寮母

褥瘡の治し方について専門的な鋭い質問、それぞれに詳しいケース記録をそえての相談。

相談電話は寮母室に直通で一日二十四時間受付けで待機している。同時に、かつての「かけこみ寺」に似た「老人かけこみ」部屋も用意した。家に何かの事情でおれなくなった老人に一夜の宿を提供する仕組みである。めったにないだろうが、かけこむ所があるという安心感を大事にしたい。こうして、任運荘は活動の経過の中でもはやボランティアを待ち望むことを止め、自らがボランティアとしてその機能をコミュニティに捧げることに気づき始めた。

入りたいが息子が許してくれない。「にんうん荘」便りは家族に悪いので送らないでほしい。

19 下関市・妹（家庭より）

兄六十六歳に床ずれ、嫁が世話しているので、思うにまかせない。

20 三重県・嫁（家庭より）

老父單車から転落歩行困難。ポータブルトイレ使用にも失敗。二人の子供もあり、父の世話がしかねる。父に意欲をもたす方法を。

21 愛知県・娘（家庭より）

倒れて一カ月の父。おむつをあてるのがよいのか、はずすのがよいのか。

22 名古屋市・福祉大学生

おむつを外すことの意義を問う。実習をさせてほしい。老人介護の理論と実践を体系化したい。

23 東京都・特養ホーム寮母

褥瘡の治し方について専門的な鋭い質問、それぞれに詳しいケース記録をそえての相談。

相談電話は寮母室に直通で一日二十四時間受け付けで待機している。同時に、かつての「かけこみ寺」に似た「老人かけこみ」部屋も用意した。家に何かの事情でおれなくなった老人に一夜の宿を提供する仕組みである。めったにないだろうが、かけこみ所があるという安心感を大事にしたい。こうして、任運荘は活動の経過の中でもはやボランティアを待ち望むことを止め、自らがボランティアとしてその機能をコミュニティに捧げることに気づき始めた。

寝ついて八年の実母、骨折して床ずれができたが、やっと治った。おむつ外しの方法を。

11 行橋市・本人（家庭より）

寝ついて二十年、新聞で任運荘を知った。入所手続きを。入浴がしたい。リハビリがしたい。

12 同右・娘

母は地城のホームを見学して納得できず、任運荘を強く希望。叶えさせて新しい人生を歩かせたい。

13 福岡市・病院

おむつ外しの方法を具体的に教示されたい。特に失禁者のおむつ外しについて。近く訪問したい。

14 北九州市・主婦（家庭より）

おむつを作って近くのホームにあげようとしたら断られた。必要なら送るからサイズを示せ。

15 熊本市・娘（家庭より）

痴呆化した母、五年前より寝たきり。話しは理解できるが、意欲全くなく、失禁も治らない。情ない。

16 福岡市・妻と三男（病院より） 来訪

入院中の父に床ずれ十センチでき、病院側は「熱がとれねば治らない」というが、ぜひ治したい。病院が任運荘の治療法を許可するかどうか心配。

17 下関市・主婦

新聞記事で亡き父母を思い出した。金一封を送る。訪問したいとの申出。

18 熊本市・本人（家庭より）

「こここそ自分を救ってくれる所」と喜んだ。家族はよくしてくれるが、嫁は身重で不安。ホームに

家庭だけでは処理しきれない老人介護を支える一つの力として、自らの任務をコミュニティの中に位置づけていこう。

私たちは土地を提供されたから、そのお礼として施設の地域社会への開放を努力しているのではない。福祉の本質的あり方としてこのことを捉えようとしているのである。

いったい、現代国家の存在理由は福祉国家という形態であることに異存はないであろう。福祉国家の内容は議会が決定し、政府が実行しなければならぬ責務である。東京都から、都の行財政の診断を委嘱されたこともある、イギリスの行政学者として著名なロブソンは福祉国家と福祉社会とを区別し、国民が福祉国家のいろいろな給付を受ける権利は、それに対応する義務を伴うものであり、その義務を遂行する福祉社会があってこそ福祉国家は存立することができるとしている。福祉を「とるだけ」と考えがちな日本の現状を思う時、イギリスの福祉国家を鋭く批判しているロブソンの見解は貴重とすべきであろう。

彼はいう。「権利と義務が補足しあう必要はとりわけ社会福祉の分野で大きい」。また、「社会全体に共同意識と公共心が存在すること、それが福祉国家の基本的要件である」。対応する福祉社会が福祉国家の基礎になれば、その国民は真の福祉国家を享受するようなことはないであろう（W・A・ロブソン著 辻清明他訳『福祉国家と福祉社会』）。いいかえれば福祉国家の建設は国民一人一人が参加する福祉社会の創造と相補完する関係である。

任運荘は福祉社会創造の一翼を生きねばならない。

現実的に考えても、過疎地対策の一つとしての福祉施設の設立の意義は軽くはない。任運荘、やがて後から併設される重度障害者の療養施設「とうとうしゃ 騰々舎」の二施設の経費は年間約三億円で、町の経費をいためないで安定的に町経済に流入する。職員六十名のほとんどが町民であるし、これらのまじめな働きぶりは住民の福祉意識に直接的影響を及ぼすであろう。また、住民の福祉的批判や反応もこれら職員を通じて施設内に流入する。私たちはこの面においても福祉社会の構築に直接的に関与していることになる。

概して農村地区では住民の福祉的活動は地道であり、むしろ低調皆無といったほうが正しい。そうした地域に今ようやく一つの動きが見られ始めた。「一人一枚おむつ運動」である。大分合同新聞(55・7・17)は伝えている。

——緒方町連合婦人会は老人福祉活動として「一人一枚おむつ」運動を行っている。会員一人が一枚ずつおむつを出し合い特別養護老人ホームに寄贈しているもので、ホーム側も歓迎している。会員の負担にならないよう古い浴衣を利用してほしいと呼びかけたが、「わずか一枚だし、新しいサランの方がお年寄りにも気持ちがいいだろう」という主婦も多く、集まったおむつはきれいな善意の品ばかり。

中央地区会長は「みんなの意識が高まっているのかよく協力してくれます。これからも機会あることにおむつ運動を続けたい」。(抜き書き)——

現実的に考えても、過疎地対策の一つとしての福祉施設の設立の意義は軽くはない。任運荘、やがて後から併設される重度障害者の療養施設「とうとうしゃ騰々舎」の二施設の経費は年間約三億円で、町の経費をいためないで安定的に町経済に流入する。職員六十名のほとんどが町民であるし、これらのまじめな働きぶりは住民の福祉意識に直接の影響を及ぼすであろう。また、住民の福祉的批判や反応もこれら職員を通じて施設内に流入する。私たちはこの面においても福祉社会の構築に直接的に関与していることになる。

概して農村地区では住民の福祉的活動は地道であり、むしろ低調皆無といったほうが正しい。そうした地域に今ようやく一つの動きが見られ始めた。「一人一枚おむつ運動」である。大分合同新聞(55・7・17)は伝えている。

——緒方町連合婦人会は老人福祉活動として「一人一枚おむつ」運動を行っている。会員一人が一枚ずつおむつを出し合い特別養護老人ホームに寄贈しているもので、ホーム側も歓迎している。会員の負担にならないよう古い浴衣を利用してほしいと呼びかけたが、「わずか一枚だし、新しいサランの方がお年寄りにも気持ちがいいだろう」という主婦も多く、集まったおむつはきれいな善意の品ばかり。

中央地区会長は「みんなの意識が高まっているのかよく協力してくれます。これからも機会あることにおむつ運動を続けたい」。(抜き書き)——

家庭だけでは処理しきれない老人介護を支える一つの力として、自らの任務をコミュニティの中に位置づけていこう。

私たちは土地を提供されたから、そのお礼として施設の地域社会への開放を努力しているのではない。福祉の本質的あり方としてこのことを捉えようとしているのである。

いったい、現代国家の存在理由は福祉国家という形態であることに異存はないであろう。福祉国家の内容は議会が決定し、政府が実行しなければならない責務である。東京都から、都の行財政の診断を委嘱されたこともある、イギリスの行政学者として著名なロブソンは福祉国家と福祉社会とを区別し、国民が福祉国家のいろいろな給付を受ける権利は、それに対応する義務を伴うものであり、その義務を遂行する福祉社会があってこそ福祉国家は存立することができるとしている。福祉を「とるだけ」と考えがちな日本の現状を思う時、イギリスの福祉国家を鋭く批判しているロブソンの見解は貴重とすべきであろう。

彼はいう。「権利と義務が補足しあう必要はとりわけ社会福祉の分野で大きい」。また、「社会全体に共同意識と公共心が存在すること、それが福祉国家の基本的要件である」。対応する福祉社会が福祉国家の基礎になれば、その国民は真の福祉国家を享受するようなことはないであろう（W・A・ロブソン著 辻清明他訳『福祉国家と福祉社会』）。いいかえれば福祉国家の建設は国民一人一人が参加する福祉社会の創造と相補完する関係である。

任運荘は福祉社会創造の一翼を生きねばならない。

これは寝たきり老人に対する住民の意識の変化であり、このことはやがて「一枚のおむつ」運動にとどまらず、在宅近隣の「寝たきり老人への愛」の運動となり、「独居老人への訪問」運動などへ展開されていくであろう。さらにその風潮はやがて個々の自主的意識に基づく個人がする奉仕活動にも発展するであろう。

高齢化社会の重圧は真先に過疎の地にかかってくる。中でもその地の高齢者はそれをもろに被る。だから、過疎地域では福祉施設の役割は物心両面において期待されねばならない。

(2) 貧相な「生活の場」

近頃の老人ホームの建物は外観や玄関入口、ホール等をホテルのように美しくしている。それに比べて任運荘の建物は平屋建のせいもあって、一層見栄えがしない。でも、ここでは土とつながる日々があって、季節の移りを知らす草木があるのが、老人たちにとって慰めであろう。まず形態から見て、福祉施設の建物はほぼ三つの型に分けられる。

片廊下にして利用者の居室を一直線に並べる型。第二は中に廊下をはさんで居室を配置する型。

第三は幾つかのブロックに分けて、それぞれの部屋が小さく温かく群れるように分散する型。敷地が自由にデザインできて採光が十分とれる広さがあれば、第三の型が一番よい。任運荘は敷地の形状に困難な条件をもっていたので、採光と避難を重点にして片廊下型にしたが、廊下が長く単調で

いかにも施設らしい。この居室を主軸にして、真中から廊下で尾翼に当たる管理棟と連結する飛行機の形である。

定員も現員も常に一定して五十名。こんな当然のことをなぜ記さねばならぬのか。長い風習で特養では定員以上の人員を確保して、安全経営をしていた傾向が強いからである。厚生省はこの弊風を止めるように指導しているから、もう改まることであろう。四人部屋十室、二人部屋五、個室の静養室二。各室の枕もとの上部の壁に横木を張付けて、自由にものを貼ったり、釘を打ったりできるようにした。ホームによっては壁が汚れ放しになっていたり、逆に使用禁止をしていたり、それは何れも心ないことだ。横木には家族の写真や持参した額や品評会の表彰状、産婆の免許証やカレンダー等を思い思いに掛けて、乱雑ではあるが自由な空間が、ほんの少しだけ確保されている。

食堂は談話室を兼ねて喫茶室風にして、丸窓で飾った。

洗濯室。任運荘での宝ものはおむつである。リース制にしておむつ洗濯の必要のない施設もふえたが、ここでは今なお洗濯室は心臓部に当たる。設計士がいぶかるのを抑えて暖房を入れた。それは、ある施設を見学した折、洗濯室の老婦人の言葉が今も忘れられないからである。「ここは夏はムロ、冬は冷蔵庫なみ」と。一般浴室は湯による床暖房、特殊浴室は電気床暖房にして、冬期入浴を介護する職員が冷えぬようにした。

ホームには霊安室が必置条件であるが、私たちはそれを朝夕自由にお参りする礼拝堂として使っている。阿弥陀像を安置して聖なる場所ではあるが、心くつろげる場でもある。最近、新築したば

いかにも施設らしい。この居室を主軸にして、真中から廊下で尾翼に当たる管理棟と連結する飛行機の形である。

定員も現員も常に一定して五十名。こんな当然のことをなぜ記さねばならぬのか。長い風習で特養では定員以上の人員を確保して、安全経営をしていた傾向が強いからである。厚生省はこの弊風を止めるように指導しているから、もう改まることであろう。四人部屋十室、二人部屋五、個室の静養室二。各室の枕もとの上部の壁に横木を張付けて、自由にものを貼ったり、釘を打ったりできるようにした。ホームによっては壁が汚れ放しになっていたり、逆に使用禁止をしていたり、それは何れも心ないことだ。横木には家族の写真や持参した額や品評会の表彰状、産婆の免許証やカレンダー等を思い思いに掛けて、乱雑ではあるが自由な空間が、ほんの少しだけ確保されている。

食堂は談話室を兼ねて喫茶室風にして、丸窓で飾った。

洗濯室。任運荘での宝ものはおむつである。リース制にしておむつ洗濯の必要のない施設もふえたが、ここでは今なお洗濯室は心臓部に当たる。設計士がいぶかるのを抑えて暖房を入れた。それは、ある施設を見学した折、洗濯室の老婦人の言葉が今も忘れられないからである。「ここは夏はムロ、冬は冷蔵庫なみ」と。一般浴室は湯による床暖房、特殊浴室は電気床暖房にして、冬期入浴を介護する職員が冷えぬようにした。

ホームには靈安室が必置条件であるが、私たちはそれを朝夕自由にお参りする礼拝堂として使っている。阿弥陀像を安置して聖なる場所ではあるが、心くつろげる場でもある。最近、新築したば

これは寝たきり老人に対する住民の意識の変化であり、このことはやがて「一枚のおむつ」運動にとどまらず、在宅近隣の「寝たきり老人への愛」の運動となり、「独居老人への訪問」運動などへ展開されていくであろう。さらにその風潮はやがて個々の自主的意識に基づく個人がする奉仕活動にも発展するであろう。

高齢化社会の重圧は真先に過疎の地にかかってくる。中でもその地の高齢者はそれをもろに被る。だから、過疎地域では福祉施設の役割は物心両面において期待されねばならない。

(2) 貧相な「生活の場」

近頃の老人ホームの建物は外観や玄関入口、ホール等をホテルのように美しくしている。それと比べて任運荘の建物は平屋建のせいもあって、一層見栄えがしない。でも、ここでは土とつながる日々があって、季節の移りを知らす草木があるのが、老人たちにとって慰めであろう。まず形態から見て、福祉施設の建物はほぼ三つの型に分けられる。

片廊下にして利用者の居室を一直線に並べる型。第二は中に廊下をはさんで居室を配置する型。

第三は幾つかのブロックに分けて、それぞれの部屋が小さく温かく群れるように分散する型。敷地が自由にデザインできて採光が十分とれる広さがあれば、第三の型が一番よい。任運荘は敷地の形状に困難な条件をもっていたので、採光と避難を重点にして片廊下型にしたが、廊下が長く単調で

かりの埼玉県某ホームを訪問したが、霊安室を見て驚いた。建物の一番奥に鉄の扉で仕切られた白壁の小室が設けられ、正面に棺を置く白木の台が造りつけられ、右隅に方形の穴があいている。お棺がそこを押し出されて裏門に続く仕組みである。永遠の旅への出発を、他の老人たちには知らない配慮であろう。

私たちはその考えには賛成できない。死者へは心をつくして皆でお見送りするのが最高の礼儀である。特養では死は生者にとって大切な日常事である。任運荘では老人が亡くなると、全職員で浄めて礼拝堂に安置し、移動できる老人たち全員の焼香がなされる。皆に玄関で見送られてホームを後にする。今までの永い介護を完結するかのよう、寮母たちは無言のままたずんで、見えなくなくても暫くは動かない。死を大切に扱うが故に、生がまた大切であるのであろう。

居室

ホームの眼目は居室である。利用者はその生涯をここで過ごすからである。特養は常に介護を要するので病院に似ているが、反面病院とは違って居住の場でもある。病室と居室という二つの矛盾する条件をどう満たすか。それが一番悩む点である。しかし、施設は安全管理主義にたちやすいので、多くの場合、病院の病室に近づけて設計しているようだ。某ホームでは隣室と隔てる壁以外はすべて透明ガラスを使用して、廊下側からも外庭からも見透せるほどで、金魚槽のようになっていた。ここには落ち着ける居住性はない。健康人なら激しい情緒不安に襲われてしまう。

一見それとは逆のような工夫に出会ったことがある。外側のガラスはすべて不透明にして、空さ
えも見せない。「外が見えると里心がつくから」と経営者は説明していた。もはや説明の必要もな
く、管理主義の極まったものである。このホームに住む年寄りの身の上に心泣かねばならない。そ
の頃は定員超過が認められていたのか、廊下までベッドが詰められ、居室に戸はなかった。つい
にえば、管理者の部屋にシャンデリヤが輝き、虎の皮を掛けた応接椅子があり、グレートデー
ンが同居していた。この犬は金庫番なのだろうか。

では、任運荘の居室はどうなっているか。ベッドに横たわったままで青空と中庭の芝生が見られ
るが、外側からのぞかれることはない。廊下側からの丸見えは防がれているが、採光ガラスからの
見透しはプライバシーを完全には守ってくれていない。そして、出入する老人によっては締めるべ
き戸をいちいち閉じないので、明け放しになることもある。そんな時でも、寮母たちはノックして
入室する。入口でもベッドの頭上にでも今まで使っていた門札でも掛けたりとすすめるが、実行し
ているのは一人だけ。

養護老人ホームでは個室制に移行すべきことは、もはや常識となったが、特養ホームについても
考え方は同じであるべきだ。北欧を旅した時に見たのは総個室型と個室と雑居部屋併用型の二つで
あった。スイスの老人集合病院の場合は数人の大部屋から小部屋、個室と分けられ、問いもしない
のに「お金でなく病状で部屋をふり分ける」と説明していた。

一見それとは逆のような工夫に出会ったことがある。外側のガラスはすべて不透明にして、空さ
えも見せない。「外が見えると里心がつくから」と経営者は説明していた。もはや説明の必要もな
く、管理主義の極まったものである。このホームに住む年寄りの身の上に心泣かねばならない。そ
の頃は定員超過が認められていたのか、廊下までベッドが詰められ、居室に戸はなかった。つい
にえば、管理者の部屋にシャンデリヤが輝き、虎の皮を掛けた応接椅子があり、グレートデー
ンが同居していた。この犬は金庫番なのだろうか。

では、任運荘の居室はどうなっているか。ベッドに横たわったままで青空と中庭の芝生が見られ
るが、外側からのぞかれることはない。廊下側からの丸見えは防がれているが、採光ガラスからの
見透しはプライバシーを完全には守ってくれていない。そして、出入する老人によっては締めるべ
き戸をいっち閉じないので、明け放しになることもある。そんな時でも、寮母たちはノックして
入室する。入口でもベッドの頭上にでも今まで使っていた門札でも掛けたりとすすめるが、実行し
ているのは一人だけ。

養護老人ホームでは個室制に移行すべきことは、もはや常識となったが、特養ホームについても
考え方は同じであるべきだ。北欧を旅した時に見たのは総個室型と個室と雑居部屋併用型の二つで
あった。スイスの老人集合病院の場合は数人の大部屋から小部屋、個室と分けられ、問いもしない
のに「お金でなく病状で部屋をふり分ける」と説明していた。

かりの埼玉県某ホームを訪問したが、霊安室を見て驚いた。建物の一番奥に鉄の扉で仕切られた白壁の小室が設けられ、正面に棺を置く白木の台が造りつけられ、右隅に方形の穴があいている。お棺がそこを押し出されて裏門に続く仕組みである。永遠の旅への出発を、他の老人たちには知らせない配慮であろう。

私たちはその考えには賛成できない。死者へは心をつくして皆でお見送りするのが最高の礼儀である。特養では死は生者にとって大切な日常事である。任運荘では老人が亡くなると、全職員で浄めて礼拝堂に安置し、移動できる老人たち全員の焼香がなされる。皆に玄関で見送られてホームを後にする。今までの永い介護を完結するかのようには、寮母たちは無言のままたずんで、見えなくても暫くは動かない。死を大切に扱うが故に、生がまた大切であるのであろう。

居室

ホームの眼目は居室である。利用者はその生涯をここで過ごすからである。特養は常に介護を要するので病院に似ているが、反面病院とは違って居住の場でもある。病室と居室という二つの矛盾する条件をどう満たすか。それが一番悩む点である。しかし、施設は安全管理主義にたちやすいので、多くの場合、病院の病室に近づけて設計しているようだ。某ホームでは隣室と隔てる壁以外はすべて透明ガラスを使用して、廊下側からも外庭からも見透せるほどで、金魚槽のようになっていた。ここには落ち着ける居住性はない。健康人なら激しい情緒不安に襲われてしまう。

すべての病老人を個室がよいとして決めてかかるのは考えもので、家庭で過保護にされていたとか病院で個室暮らしをしていた者には、まず個室のもつ精神的弊害を除去することが先決の場合もある。個室では「やる」気をなくし、寝たきりが作られるからである。担架に乗せられて入所するような老人も、四人部屋に入ってきてど肝をぬかれる。自分より明らかに症状の重い人が自力で動き、リハビリに参加しているからである。彼が数日もしないで廊下を歩き始めるのはごく普通の風景である。同室雑居は病弱老人に対して、ひとのふりを見て向上心を自分にかきたてさせてくれる作用をもっている。

反面、同居は低い方向に老人をひきずりこんでいる場合も多い。人間の易きにつく習性とホームの処遇とが相互作用して、精神的にも身体的にも低い水準の老人に合わせて、低水準におし下げられてしまう。私たちはこのようなケースに心を痛める。それはホームの責任だからである。文化的な人生経歴のある人などには個室が望ましい。身体的な著しい差異はそう問題はないが、文化的水準の落差のありすぎる者どうしが同室で生活するのは問題である。

一番問題になるのは精神的な障害者である。痴呆状態を含めて、これらの者との同室は精神的に参ってしまい、諦め、やがて無気力となり、さらに仮性の痴呆状態にも陥っていく。「気持ちが病院にいる」と自らの境涯を嘲っている老人の言葉に、私たちは無力感を覚えることもある。

特養の入所条件に精神的（障害の）介護を必要とする者も含まれるので、精神病院に入れるより特養の方がまだましだとして家族の入所希望は強いから、個室の整備は特養を正常化するためにも

必要である。しかし、より根本的には中央社会福祉審議会の意見(五十二年)のように、「(特養ホームとは)別個の観点からこれらの者の収容の場の整備等、その処遇のあり方について早急に検討されることが望ましい」。

ついでに、特養ホームによっては、少しもてあますと安易に精神病院に移すケースも少なくはないが、その数が多いのは特養としてはよいホームではないといえよう。任運荘では開設以来一名。彼は危険物を持って暴れ回る元憲兵だった。

ともあれ、こうみると特養でも最低三〇四割ていどは個室が望ましい。任運荘はその意味で不備である。今はわずかに室内をカーテンで四つ、二つと仕切って個室に近づけているにすぎない。雑居は惜しみなくひとから羞恥心を奪う。それが奪われるにつれて痴呆症状も進んでいく。だから、おむつ換えの時にこのカーテンは引かれる。ふだんはそれで間仕切りすることを老人たちはお互いに遠慮しあっている。

ベッド生活

現行の特養ホーム建築補助基準では個室はおろか、自由に独りで使える空間はほとんどなく、ベッドを中心とする生活を余儀なくされる。利用者が占有できるのはベッドだけというのは悲しいが、現実である。病室がそうだからといって、このことを無反省に放置してはならない。老人をベッドにくくりつけてしまう危険性が至る所にひそんでいるからである。某施設の発表に、「機能訓練士

必要である。しかし、より根本的には中央社会福祉審議会の意見(五十二年)のように、「(特養ホームとは)別個の観点からこれらの者の収容の場の整備等、その処遇のあり方について早急に検討されることが望ましい」。

ついでに、特養ホームによっては、少しもてあますと安易に精神病院に移すケースも少なくはないらしいが、その数が多いのは特養としてはよいホームではないといえよう。任運荘では開設以来一名。彼は危険物を持って暴れ回る元憲兵だった。

ともあれ、こうみると特養でも最低三〇四割ていどは個室が望ましい。任運荘はその意味で不備である。今はわずかに室内をカーテンで四つ、二つと仕切って個室に近づけているにすぎない。雑居は惜しみなくひとから羞恥心を奪う。それが奪われるにつれて痴呆症状も進んでいく。だから、おむつ換えの時にこのカーテンは引かれる。ふだんはそれで間仕切りすることを老人たちはお互いに遠慮しあっている。

ベッド生活

現行の特養ホーム建築補助基準では個室はおろか、自由に独りで使える空間はほとんどなく、ベッドを中心とする生活を余儀なくされる。利用者が占有できるのはベッドだけというのは悲しいが、現実である。病室がそうだからといって、このことを無反省に放置してはならない。老人をベッドにくくりつけてしまう危険性が至る所にひそんでいるからである。某施設の発表に、「機能訓練士

すべての病老人を個室がよいとして決めてかかるのは考えもので、家庭で過保護にされていたとか病院で個室暮らしをしていた者には、まず個室のもつ精神的弊害を除去することが先決の場合もある。個室では「やる」気をなくし、寝たきりが作られるからである。担架に乗せられて入所するような老人も、四人部屋に入ってきてど肝をぬかれる。自分より明らかに症状の重い人が自力で動き、リハビリに参加しているからである。彼が数日もしないで廊下を歩き始めるのはごく普通の風景である。同室雑居は病弱老人に対して、ひとのふりを見て向上心を自分にかきたてさせてくれる作用をもっている。

反面、同居は低い方向に老人をひきずりこんでいる場合も多い。人間の易きにつく習性とホームの処遇とが相互作用して、精神的にも身体的にも低い水準の老人に合わせて、低水準におし下げられてしまう。私たちはこのようなケースに心を痛める。それはホームの責任だからである。文化的な人生経歴のある人などには個室が望ましい。身体的な著しい差異はそう問題はないが、文化的水準の落差のありすぎる者どうしが同室で生活するのは問題である。

一番問題になるのは精神的な障害者である。痴呆状態を含めて、これらの者との同室は精神的に参ってしまい、諦め、やがて無気力となり、さらに仮性の痴呆状態にも陥っていく。「気持ちが病院にいる」と自らの境涯を嘲っている老人の言葉に、私たちは無力感を覚えることもある。

特養の入所条件に精神的（障害の）介護を必要とする者も含まれるので、精神病院に入れるより特養の方がまだましだとして家族の入所希望は強いから、個室の整備は特養を正常化するためにも

は三名、寝たきり八割」とあった。八割もいるからリハビリ専門が三人いるのか、三人もいながら八割も寝たきりなのか、分明ではないが、八割は多すぎる。ある施設専門家が日本の特養をさして「寝たきりではなく、ほとんどが寝かせきりだ」といつていた。東京都の青少年スポーツセンターで開かれた全国生活指導員研修会(54・5・22、26)のあるグループ部会で、「寝たきり老人には、寝たきりにさせておくのが最高の処遇だ」という者あり、しかも、驚くべきことにその説に対して賛否相半ばする程であった。利用者不在の福祉研修といわれても仕方がないであろう。

さて、本来ベッドは夜だけのものであるが、その柔かさと温かさは老人には格別魅力があり、ついそれに沈みがちになる。世話する方でもそのほうが手が省け、安全で都合がよい。双方相まって二十四時間使用に拍車をかけがちになる。老人の自立の姿は見るみる崩れていく。

たしかに、「寝たきり」という語の中身はいう人によってまちまちである。特養入所の全老人を「寝たきり」とすることは極端であろうが、半数以上を普通「寝たきり」老人としている。任運荘の寮母が九州地区老人福祉施設研修大会(54・7・5 於長崎市)で「寝たきりは現在一名」と発表していっせいに非難されたことがある。寝たきり老人のための特養であってみれば、たしかにおかしい。しかし、事実、寝たきりは只一人である。その一人は医者から絶対安静を命じられている。それ以外の重い人でも十五人は一日一回は広場に運んだり、日光浴に動かし、できるだけ寝まきから普段着に着換えさす。ベッドを離れることのできる者は椅子に座らす。座るのが短時間にすぎない者でもつとめて座ってもらう。運動欲とは人間の本源的欲求の一つであるから。

最近、希望者だけベッドのマットの代りに畳を敷いたのが十二人、ふとんをたたんで畳の上の起き居を求めている。上半身だけの自由が残っている人は、座居してあみものや習字をしている。ベッドと一体の生活をできるだけ延ばすようにすることが、リハビリの基本であろう。

空間畳一枚、厳密には半枚の自由、私は相すまないと心の中で謝まる。札幌市で見た特養では、ベッドの外に畳敷きの共通の小部屋が付設されていた。使用している老人の姿はなかったが、よい設計と今も心に残る。せめてあの程度は配慮されるべきである。

就寝以外はベッドから完全に離れて動いている施設、それは愛知県東浦町の「ひかりの里のぞみの家」である。特養よりも重症者の多い身体障害者療護施設であるが、全員のベッドは美しいカバーで覆われ、重度でも車椅子に乗って動いているかストレッチャーに横たわって移動している。三度の食事も全員揃って食堂でとっているなど、特養にとっても参考にすべきものがある。

柚木崎次郎氏は報告している。

「日本では老人の自立よりも、むしろ老人のお世話が優先するようです。老人を大事にすることが日本では世話をやくことであり、ヨーロッパでは自立を促す人間らしい生活の確保ということなのです。ヨーロッパでは老人を一日中ベッドの上で寝かせておくことは、老人じしんをスポイルさせるものだという考えに立っています。ですから、昼間は衣服を着かえ、車椅子で談話室、訓練室、食堂などで、天気の良い時は広場で一日の生活の大半を過ごさせることが必要だということです」

『老人の福祉と保健』48号。

最近、希望者だけベッドのマットの代りに畳を敷いたのが十二人、ふとんをたたんで畳の上の起き居を求めている。上半身だけの自由が残っている人は、座居してあみものや習字をしている。ベッドと一体の生活をできるだけ延ばすようにすることが、リハビリの基本であろう。

空間畳一枚、厳密には半枚の自由、私は相すまいと心の中で謝まる。札幌市で見た特養では、ベッドの外に畳敷きの共通の小部屋が付設されていた。使用している老人の姿はなかったが、よい設計と今も心に残る。せめてあの程度は配慮されるべきである。

就寝以外はベッドから完全に離れて動いている施設、それは愛知県東浦町の「ひかりの里のぞみの家」である。特養よりも重症者の多い身体障害者療護施設であるが、全員のベッドは美しいカバーで覆われ、重度でも車椅子に乗って動いているかストレッチャーに横たわって移動している。三度の食事も全員揃って食堂でとっているなど、特養にとっても参考にすべきものがある。

柚木崎次郎氏は報告している。

「日本では老人の自立よりも、むしろ老人のお世話が優先するようです。老人を大事にすることが日本では世話をやくことであり、ヨーロッパでは自立を促す人間らしい生活の確保ということなのです。ヨーロッパでは老人を一日中ベッドの上で寝かせておくことは、老人じしんをスポイルさせるものだという考えに立っています。ですから、昼間は衣服を着かえ、車椅子で談話室、訓練室、食堂などで、天気の良い時は広場で一日の生活の大半を過ごさせることが必要だということです」

『老人の福祉と保健』48号。

は三名、寝たきり八割」とあった。八割もいるからリハビリ専門が三人いるのか、三人もいながら八割も寝たきりなのか、分明ではないが、八割は多すぎる。ある施設専門家が日本の特養をさして「寝たきりではなく、ほとんどが寝かせきりだ」といつていた。東京都の青少年スポーツセンターで開かれた全国生活指導員研修会（54・5・22、26）のあるグループ部会で、「寝たきり老人には、寝たきりにさせておくのが最高の処遇だ」という者あり、しかも、驚くべきことにその説に対して賛否相半ばする程であった。利用者不在の福祉研修といわれても仕方がないであろう。

さて、本来ベッドは夜だけのものであるが、その柔かさと温かさは老人には格別魅力があり、ついそれに沈みがちになる。世話する方でもそのほうが手が省け、安全で都合がよい。双方相まって二十四時間使用に拍車をかけがちになる。老人の自立の姿は見るみる崩れていく。

たしかに、「寝たきり」という語の中身はいう人によってまちまちである。特養入所の全老人を「寝たきり」とすることは極端であろうが、半数以上を普通「寝たきり」老人としている。任運荘の寮母が九州地区老人福祉施設研修大会（54・7・5 於長崎市）で「寝たきりは現在一名」と発表していっせいに非難されたことがある。寝たきり老人のための特養であってみれば、たしかにおかしい。しかし、事実、寝たきりは只一人である。その一人は医者から絶対安静を命じられている。それ以外の重い人でも十五人は一日一回は広場に運んだり、日光浴に動かし、できるだけ寝まきから普段着に着換えさす。ベッドを離れることのできる者は椅子に座らす。座るのが短時間にすぎない者でもつとめて座ってもらう。運動欲とは人間の本源的欲求の一つであるから。

北欧の施設では部屋に寝ている人はごく僅かで、寝たきりの人の頭上にはリハビリ機具が下がり足元のベッド枠には起き上がるための用具が固定されている。ちなみに職員数は日本の定数の倍をずっとこえていた。寝かせきりにさせないためには、職員の働く量はずっと増加するからである。

(3) 初心忘るべからず

特養を思い立った時から、施設の中心になる人材を心の中に描いていた。丁度、その頃、県下のホーム・ヘルパーの会合でひとりのヘルパーの感動的な発表に私は出会った。

——ある年の夏、はじめて受けもつ老婆を訪問し、湯でからだを洗ってあげたが、流し捨ててしまうにはお湯がもったいなかったで、その湯で自分の足を洗ったのです。すると、小さい部屋ではあるが、奥の方で見ていた老婆が急に泣きだしたのです。びっくりした私が何か悪いことをしたのかと尋ねると、「そうじゃない、奥さんが私をきたながらしないで、お湯を使ってくれたのが嬉しうて、嬉しうて」と、また泣き出すのです。私も手を取りあって一緒に泣いてしまいました。——彼女はそれに理くつをつけず、誰の心にも伝わっていくヘルパーと独り暮らしの老人との出来事を話し続ける。

——もうひとりの寝たきりのおじさんとのことです。熱いお湯で指を丹念に拭き、その爪をバチ

ンパチンとつまみます。うす暗い部屋で、老人の指の先がうす紅くにじんできた。私はハッとして、思わず指先を口に入れて、息をのんでいたのです。「おじいちゃん、痛かったでしょう、ご免ね」私は恐縮して幾度も指をすった。老人はかすかに頭を横にふるだけです。喜びも悲しみも、その流れる涙によって表現する老人。なぜ、人間はこんなに淋しく老いていかなければならないのか……。

後日、ヘルパーたちの手記がガリ版刷りで送られてきた。彼女の文がまた眼についた。

——人生の終着駅とはよくいったものだ。灰色の笑いのないものであった。私の第一のとり組みは、温かい家庭的な雰囲気を作ること。私が訪問した時だけでもと決心した。

今でも胸が痛むのは八十二歳の老婆のことである。八十七歳の兄さんが運んでくる食事を、四、五日も食べていないということで、私が訪問した時は枕元に二日分の食事があり、すでに一日分は腐りかけていた。手を伸ばせば食べられる食事をなぜ食べないのかといえば、「食べればすぐ用がしなくなるので」という言葉に私はびっくり。「今日は一日私がそばにいるので、用便の心配はいらないから」と、ひと口ずつ匙でふくませる。おいしい、おいしい、と入れ歯をことごといいわせながら食べる。

ある時は訪問して、障子をあげると異臭とともに、自分の用便を始末しようとして、痛む体を動かせば動かす程、あたり一面言葉につくせない様相に凝然として立ちすくむ。手早く汚物を処理し

ンパチンとつまます。うす暗い部屋で、老人の指の先がうす紅くにじんできた。私はハッとして、思わず指先を口に入れて、息をのんでいたのです。「おじいちゃん、痛かったでしょう、ご免ね」私は恐縮して幾度も指をすった。老人はかすかに頭を横にふるだけです。喜びも悲しみも、その流れる涙によって表現する老人。なぜ、人間はこんなに淋しく老いていかなければならないのか……。

後日、ヘルパーたちの手記がガリ版刷りで送られてきた。彼女の文がまた眼についた。

——人生の終着駅とはよくいったものだ。灰色の笑いのないものであった。私の第一のとり組みは、温かい家庭的な雰囲気を作ること。私が訪問した時だけでもと決心した。

今でも胸が痛むのは八十二歳の老婆のことである。八十七歳の兄さんが運んでくる食事を、四、五日も食べていないということで、私が訪問した時は枕元に二日分の食事があり、すでに一日分は腐りかけていた。手を伸ばせば食べられる食事をなぜ食べないのかといえば、「食べればすぐ用がしたくなるので」という言葉に私はびっくり。「今日は一日私がそばにいますので、用便の心配はいらないから」と、ひと口ずつ匙でふくませる。おいしい、おいしい、と入れ歯をここといわせながら食べる。

ある時は訪問して、障子をあげると異臭とともに、自分の用便を始末しようとして、痛む体を動かせば動かす程、あたり一面言葉につくせない様相に凝然として立ちすくむ。手早く汚物を処理し

北欧の施設では部屋に寝ている人はごく僅かで、寝たきりの人の頭上にはリハビリ機具が下がり足元のベッド枠には起き上がるための用具が固定されている。ちなみに職員数は日本の定数の倍をずっとこえていた。寝かせきりにさせないためには、職員の働く量はずっと増加するからである。

(3) 初心忘るべからず

特養を思い立った時から、施設の中心になる人材を心の中に描いていた。丁度、その頃、県下のホーム・ヘルパーの会合でひとりのヘルパーの感動的な発表に私は出会った。

——ある年の夏、はじめて受けもつ老婆を訪問し、湯でからだを洗ってあげたが、流し捨ててしまふにはお湯がもったいなかったで、その湯で自分の足を洗ったのです。すると、小さい部屋ではあるが、奥の方で見ていた老婆が急に泣きだしたのです。びっくりした私が何か悪いことをしたのかと尋ねると、「そうじゃない、奥さんが私をきたながらしないで、お湯を使ってくれたのが嬉しくて、嬉しくて」と、また泣き出すのです。私も手を取りあって一緒に泣いてしまいました。——彼女はそれに理くつをつけず、誰の心にも伝わっていくヘルパーと独り暮らしの老人との出来事を話し続ける。

——もうひとりの寝たきりのおじさんとのことです。熱いお湯で指を丹念に拭き、その爪をバチ

湯をわかし、体中を拭き、ひと抱えしかない老婆を寝かせ、「おばあちゃん、川へ汚れ物を洗いにいくから」というと、やっと安堵の色が浮かぶ。介護人のある老人だったら、布団の上で大、小便するのは当たり前。しかも介護の仕方が悪いとどなる老人もいる。ところが、この老婆は自分の不始末を洗ってくればよいがと、口には出さないが、心配でならなかったのだ。久方ぶりの雨で川の水も増し、気持ちよく流れていく汚物、私は流れ水のこんなにも尊く、すばらしいと思ったことはなかった。

生まれた肉体が、今まさに消えようとし、食えること、排泄すること、生きている原理すらおろおろ気がねをしなければならぬとは……。

私は仕えている老人たちにこういいたいのです。「おじいちゃん、おばあちゃん、うんと食べて、うんちを威張ってたくさんしなさいよ」。

私の一週間は、この老人たちと共に愛い、共に喜ぶことです。私を待つ人びとがいる。待たれる俸せを貧しい私の心の糧として、日々仕え、私の残りの人生を豊かで素晴らしいものになりたい。――

固辞し続ける彼女もついに私たちの願いを聞きいれてくれた。彼女の名は北崎ハツ子。県北の豊後高田市より居をこの町に移し、老母堂も従い来て、任運荘の施設長を受けもった。開所は五十年五月十五日、この日初めて利用者八名を迎えた。任運荘にとって最も記念すべき日である。

玄関に立つと、「任運騰々」の扁額がここに入るすべての人に語りかけるよう掲げられている。

『次郎物語』の作者、下村湖人の書である。これは湖人がもはや回復できないことを知った時、書き留めたものである。良寛が愛した語のこの任運騰々とは、人は運命の中に生きるが、どんなつらい時にあっても、意気高らかに、騰々と生きよとの意味である。素人集団の任運荘は出発する。運にまかせて、しかし、施設を荷う人たちの心は沸騰していた。

『次郎物語』の作者、下村湖人の書である。これは湖人がもはや回復できないことを知った時、書き留めたものである。良寛が愛した語のこの任運騰々とは、人は運命の中に生きるが、どんなつらい時にあっても、意気高らかに、騰々と生きよとの意味である。素人集団の任運荘は出発する。運にまかせて、しかし、施設を荷う人たちの心は沸騰していた。

湯をわかし、体中を拭き、ひと抱えしかない老婆を寝かせ、「おばあちゃん、川へ汚れ物を洗いにいくから」というと、やっと安堵の色が浮かぶ。介護人のある老人だったら、布団の上で大、小便するのは当たり前。しかも介護の仕方が悪いとどなる老人もいる。ところが、この老婆は自分の不始末を洗ってくればよいがと、口には出さないが、心配でならなかったのだ。久方ぶりの雨で川の水も増し、気持ちよく流れていく汚物、私は流れ水のこんなにも尊く、すばらしいと思ったことはなかった。

生まれた肉体が、今まさに消えようとし、食えること、排泄すること、生きている原理すらおろおろ気がねをしなければならぬとは……。

私は仕えている老人たちにこういいたいのです。「おじいちゃん、おばあちゃん、うんと食べて、うんちを威張ってたくさんしなさいよ」。

私の一週間は、この老人たちと共に愛い、共に喜ぶことです。私を待つ人びとがいる。待たれる俸せを貧しい私の心の糧として、日々仕え、私の残りの人生を豊かで素晴らしいものになりたい。――

固辞し続ける彼女もついに私たちの願いを聞きいれてくれた。彼女の名は北崎ハツ子。県北の豊後高田市より居をこの町に移し、老母堂も従い来て、任運荘の施設長を受けもった。開所は五十年五月十五日、この日初めて利用者八名を迎えた。任運荘にとって最も記念すべき日である。

玄関に立つと、「任運騰々」の扁額がここに入るすべての人に語りかけるよう掲げられている。